国立東京療養所にて（『愛泉』誌第15号、１９５７年10月１日発行）

無学の凡人

――使徒行伝第４章１～31節――

１９５７年７月28日
小池辰雄

神の法則　隅の首石　無学の素人　投身体受　原始福音

【使徒行伝４】

1かれら民に語り居るとき、祭司ら・宮守頭(みやもりがしら)およびサドカイ人ら近づき来りて、2その民を教え、又イエスの事を引きて死人の中よりの復活を宣(の)ぶるを憂い、3手をかけて之を捕えしに、はや夕になりたれば、明くる日まで留置場に入れたり。4然れど、その言を聴きたる人々の中にも信ぜし者おおくありて、男の数おおよそ五千人となりたり。

5明くる日、司・長老・学者らエルサレムに会し、6大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル及び大祭司の一族みな集いて、7その中にかの二人を立てて問う『如何なる能力(ちから)いかなる名によりて此の事を行いしぞ』8この時ペテロ聖霊にて満たされ、彼らに言う『民の司たち及び長老たちよ、9我らが病める者になしし善き業(わざ)に就き、その如何にして救われしかを今日もし訊(ただ)さるるならば、10汝ら一同およびイスラエルの民みな知れ、この人の健かになりて汝らの前に立つは、ナザレのイエス・キリスト、即ち汝らが十字架に釘(つ)け、神が死人の中より甦えらせ給いし者の名に頼(よ)ることを。11このイエスは汝ら造家者(いえつくり)に軽しめられし石にして、隅(すみ)の首石(おやいし)となりたるなり。12他の者によりては救を得ることなし、天の下には我らの頼りて救わるべき他の名を、人に賜いし事なければなり』

13彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、その無学の凡人(ただびと)なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕(とも)にありし事を認む。14また医(いや)されたる人の之とともに立つを見るによりて、更に言い消す辞(ことば)なし。15ここに、命じて彼らを衆議所より退け、相共に議(はか)りて言う、16『この人々を如何にすべきぞ。彼等によりて顕著(いちじる)しき徴(しるし)の行われし事は、凡(すべ)てエルサレムに住む者に知られ、我ら之を否(いな)むこと能わねばなり。17然れど愈々(いよいよ)ひろく民の中に言い弘(ひろま)らぬように、彼らを脅(おびや)かして、今より後かの名によりて誰にも語る事なからしめん』18乃(すなわ)ち彼らを呼び、一切イエスの名によりて語り、また教えざ

らんことを命じたり。19ペテロとヨハネと答えていう『神に聴くよりも汝らに聴くは、神の御前に正しきか、汝ら之を審け。20我らは見しこと聴きしことを語らざるを得ず』21民みな此の有りし事に就きて神を崇めたれば、彼らを罰するに由なく、更にまた脅かして釈せり。22かの徴によりて医されし人は四十歳余なりしなり。

23彼ら釈されて、その友の許にゆき、祭司長・長老らの言いし凡てのことを告げたれば、24之を聞きて皆心を一つにし、神に対い、声を揚げて言う『主よ、汝は天と地と海と、其の中のあらゆる物とを造り給えり。25曾て聖霊によりて、汝の僕われらの先祖ダビデでの口をもて「何ゆえ異邦人は騒ぎ立ち、民らは空しき事を謀るぞ。26世の王たちは共に立ち、司らは一つにあつまりて、主および其のキリストに逆らう」と宣給えり。27果たしてヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人およびイスラエルの民等とともに、汝の油そそぎ給いし聖なる僕イエスに逆いて、此の都にあつまり、28御手と御旨とにて、斯く成るべしと預じめ定め給いし事をなせり。29主よ、今かれらの脅喝を御覧し、僕らに御言を聊かも臆することなく語らせ、30御手をのべて医を施させ、汝の聖なる僕イエスの名によりて、徴と不思議とを行わせ給え』31祈り終えしとき、其の集りおる処ふるい動き、みな聖霊にて満たされ、臆することなく神の御言を語れり。

●神の法則

久し振りに東療に来ました。私も東療にくるようになってから長いおつきあいで、皆さんの顔は少しずつ変ってますが、私は一向に変りません。私としては、新しい方がお見えになるのを殊の外うれしく思う次第です。福音は決して何年聞いたからいいというものでなく、常に新たに前進して行かなければならないものです。

今日は使徒行伝の第４章をやります。単刀直入にやります。

1かれら民に語り居るとき、祭司ら・宮守頭およびサドカイ人ら近づき来りて、2その民を教え、又イエスの事を引きて死人の中よりの復活を宣ぶるを憂い、3手をかけて之を捕えしに、はや夕になりたれば、明くる日まで留置場に入れたり。4然れど、その言を聴きたる人々の中にも信ぜし者おおくありて、男の数おおよそ五千人となりたり。

祭司とか宮守頭などという人々は、宮司みたいなものです。サドカイ人というのは、ギリシアがパレスチナを治下においた頃から始まっていますが、ユダヤ人の中でもギリシア化したハイカラな文化人の方で、神秘的なものを信じようとしない者です。パリサイ人はむしろ保守党でありまして、モーセの律法と伝統を厳しく守り、これを遵奉してその正統

的な信仰を保持して行こうとするもので、その志はよいのですが、しかし国粋が過ぎるとおかしくなります。サドカイ人も同様で、舶来が過ぎてまた困った角度になったわけです。このサドカイも、祭司階級と同列でありまして、貴族的資産階級を代表して、なかなか勢力を持っていた。この祭司とか宮守頭とか、サドカイ人とかいうのがぐるになって、ペテロとヨハネが

「その民を教え、又イエスの事を引きて死人の中よりの復活を宣ぶるを憂い」

手をかけてこれを捕えたところが、もう裁判の時刻は過ぎ夕方になったので、明日のことにして留置場に入れた。ところが、そのペテロ、ヨハネの言にうたれて信じた者は男だけでも五千人で、非常に多かったわけです。

5明くる日、司・長老・学者らエルサレムに会し、6大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル及び大祭司の一族みな集いて、7その中にかの二人を立てて問う

どういうわけで第３章に書いてあるような跛者を立たすようなことをするか、何か呪業ではないかということもあるのでしょうが、

『如何なる能力いかなる名によりて此の事を行いしぞ』

と。根拠を問いただしたわけです。

8この時ペテロ聖霊にて満たされ、彼らに言う

「聖霊に満たされる」とは即ち、キリストの権威に満たされることで、この世の権威とは質が違うわけですから、ペテロは臆するところなく彼らに言った。

『民の司たち及び長老たちよ、9我らが病める者になしし善き業に就き、その如何にして救われしかを今日もし訊さるるならば、10汝ら一同およびイスラエルの民みな知れ、

ということは、いま自分たちは訊されているが、これこそよき機会であるというわけで、まずはっきりと宣言しているわけです。

この人の健かになりて汝らの前に立つは、ナザレのイエス・キリスト、即ち汝らが十字架に釘け、神が死人の中より甦えらせ給いし者の名に頼ることを。

と、実に簡単明瞭に言っております。「この人」とは、第３章８節に書いてあるように、生まれながらの足なえで、ペテロの祈りによりナザレのイエスの名によって立ちあがり、かつ歩みかつ躍った人であります。私は、こういうところは何度読んでもうれしくてしょうがない。

自然界にも神さまの驚くべき法則が働いています。自由とは何か。神の法則の世界です。天則これ自由というのです。私たちの生活は、精神も肉体も神さまの法則によらないとおかしなことになる。このペテロとヨハネはキリストの生命の法則に乗り、神の生命の法則に乗っかったからこの証しができたのです。私たちは見えない世界においていつも戦って

います。

「骨の中に戦があるなり」

と、ヨブがいった通り、善と悪、光と闇はいつも戦っている。この戦においてキリストに全面的に生きる使徒たちは、神の驚くべき生命が溢れてくるから勝利する。いわんやナザレのイエスは全く言語に絶する事態だった。摩訶不思議でもなんでもない。奇蹟でもない。神さまの驚くべき法則が働いている。それがわからないから奇蹟だなどという。

キリストが、

「心を尽くし、力を尽くし、精神を尽くして」

という疑いのない、分裂の無い世界――ドイツ語で「疑う」とは「zweifeln（ツヴァイフェルン）」といいます。「ツヴァイフェル」とは「二つにする」ということで、心が二つになるときにこれが疑いです――

「あれか、これか」

ではなく、

「かくあらざるを得ず」

という世界に入れば、その瞬間から勝利している。祈りというのはそうなのです。祈った瞬間にぐっと力が来なくてはいけない。キリストは、

「祈りはすでに聞かれているのだ」

と言われたので、

「祈られたことは直ちにそれを現実に受けとります」

と言っていかなくてはダメです。神さまの法則に投身する。これが祈りの秘訣であります。そして必ずそれで勝って行くのです。

ペテロはこの世の権威に対して、神の法則の権威でものを言い始めたわけです。即ち

「なんじらが十字架につけたキリスト・イエス」は、二千年前と今とでは違うじやないか」

と言いますが、二千年前に私たちが居合わせたならば、私たちはやはりキリストの十字架を身をもって守る人ではないでしょう。これが、私たちがキリストを十字架にかけた罪です。アダム、イヴが禁断の木の実を食ったのは古い昔の話であるが、また今の話でもあります。神さまの法則で「食うな」とあったのに食った。これは法則にのらないのです。モーセの十誡はモーセの律法という。神の法（のり）なのです。

法の世界に入ったら素晴らしいことになるのですが、皆それを受けそこなってしまった。人類が何億年という年を経て、また何億という人が歴史に出てきましたが、一人もこの法則に本当にのる人が無いのです。これを「罪」といいます。ただ、ナザレのイエスだけがこの法則に乗っかった。だから彼は私たちを救うただ一人の人です。その前に拝跪（はいき）すべき

人はこのナザレのイエスの他にない。だからペテロが、

12他の者によりては救を得ることなし、天の下には我らの頼りて救わるべき他の名を、人に賜いし事なければなり』

と言ったのです。

●隅の首石

ゲーテはエッカーマンとの対話の最後のところで言っています。

「キリストの前にあなたは跪（ひざまず）くかと、もし私に問われたなら、私は無条件にハイという」

と。さすがにゲーテは偉大です。偉大ということはどういうことかというと、本当に謙虚を知っているということです。偉大な人はみな真理の前に頭を下げる人なのです。

祭司とグルになっているサドカイ人たちは、死人の中の復活を宣（の）べているのを憂い、これを「神をまどわす者だ」といって捕え、何とかしようというのでしょうが、その画策をペテロもヨハネも知っておりますから、ペテロは真直ぐ大上段に構えて、

ナザレのイエス・キリスト、即ち汝らが十字架に釘（つ）け、神が死人の中より甦えらせ給いし者の名に頼（よ）ることを。11このイエスは汝ら造家者（いえつくり）に軽しめられし石にして、隅（すみ）の首石（おやいし）となりたるなり。

といった。詩篇118篇22節に、

「工師（いえつくり）のすてたる石はすみの首石（おやいし）となれり」

と書いてあり、キリストがしばしば引用されたところです。造家者（いえつくり）即ち宗教界を牛耳っているところのあなたがたが軽しめて捨てたイエス・キリストが、逆に自分等の土台石となったというわけです。

私たちの称える「原始福音」とは即ち

「使徒的信仰」

のことなのです。私たちは

「キリストの名により」

といって祈ります。けれども使徒たちが本当に、

「ナザレのイエス・キリストの名によって」

と言ったときに、如何に現実の中に本当にキリストの実によっていたか。この点限りなく、私たちは、

「御名によって」

の現実というものをお互いの生活をもってつかまえて行かなくてはダメです。そこに「修練」といってはちよっとおかしいですが、生活の現存、祈りの実践ということに大切な意味があります。信仰の世界は、進むか退くかのどちらかで、少しも停滞しておりません。

どうか皆さん、つまずいても転んでもいいですから、立ち上って見ると、必ず前進して

いるという歩き方をしてください。

「人がああ言った、こう言った」

と、人の言うことに執らわれないで、お互いに愛し合い信じ合って乗り越えて行かなければなりません。ナザレのイエス・キリストが私たちの間にあって常に生命づけを行ってくださいます。ペテロも聖霊に満たされ、その言は周囲を圧倒している。

イザヤ書28章16節に、

「このゆえに神エホバかくいい給う、視よわれシオンに一つの石をすえてその基（もとい）となせり。これは試みをへたる石、とうとき隅石（すみいし）、かたくすえたる石なり。これに依頼（よりたの）むものはあわつることなし」

とのキリスト預言にある通りです。

●無学の素人

13 彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、その無学の凡人（ただびと）なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕（とも）にありし事を認む。14 また医（いや）さ れたる人の之とともに立つを見るによりて、更に言い消す辞（ことば）なし。

観念の世界ではなく実証の世界です。「我思う」なんていう世界ではなく、

「私はかく告白せざるを得ません」

という世界。否（いな）、何も言わなくとも天的権威の実証している世界です。

そこで、

「無学の凡人（ただびと）」

というのが今日の題でありますが、「無学」という言葉はギリシャ語で「グラマチウス」に否定の「ア」がついたものです。

「グラマチウス」

は「書記、秘書」とか、とにかくものを書く人のこと。昔、印刷術がなかった頃は聖書を羊皮紙に書き写して、シナゴーク（会堂）に置いておいた。それら書物を書く人を「グラマチウス」といった。これと反対に「文字を知らない人、文盲、学問のない人」は

「アグラマチウス」

です。また、

「凡人（ただびと）」

とありますが、これは「イヂオテース」といって

「素人（しろうと）」

という字。例えば将軍に対して兵卒、少し下っ葉の使われる連中がこの「イヂオテース」というのであります。即ちこの使徒たちは無学にして素人だったのです。今のキリスト教は学問教です。私も聖書をまがりなりにも原語で読んでいますが、しかし、私は

「聖書はギリシャ語やヘブライ語がわからなければ読めない」とは思いません。それは相対的な意味において必要なので、絶対的な意味においては必要ではありません。ただ原語が出来て参考書がたくさん読める人たちのいうことが権威のあるように何となくなってきましたが、こと福音に関しては、御霊において権威があるので、その他の一切のものに権威があるのではないのです。それゆえキリストは、

「学者らの如くならず、権威ある者のごとく教える」（マタイ7・29）

とあるように、神の権威において語られた。素人（しろうと）という言葉は日本語で「素」と書きますが、純な白紙的なものをいうので、白紙のような人が

「無学の素人」

です。大工のイエスも如何なる専門家でもなかった。

私はバルトやブルンナーの偉さというものは、専門家でありながらその専門に執われないところに素晴らしさがあると思う。人間というものは神さまの前に、白紙、素地でございますという態度に出なければ、真理は映ってこないのです。だから絶学しなければならない。絶学の学がこの無学であり、素人の福音の学であります。コリント前書2章でパウロが、

「7**我らは奥義を解きて神の智慧を語る、即ち隠れたる智慧にして、神われらの光栄のために、世の創（はじめ）の先より預（あらか）じめ定め給いしものなり。**8**この世の司（つかさ）には之を知る者なかりき、もし知らば栄光の主を十字架に釘（つ）けざりしならん。**

と言っていますが、このキリストを十字架に釘ける私たちの生まれつきの知識は本当の智慧の世界に入らないのです。続いて、

9**録（しる）して『神のおのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』と有るが如し。**

とあります。いいですか。福音において学ぶところのものは、

「未だ眼が見ず、耳が聞かず、心も思わなかった世界」

で、これは自分の側に何か出来上がった学があってはダメなのです。人間的な学が棄てられるところに本当の天学が始まる。ですからまた、

10**されど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。**

とあります。御霊は私たちの意志、感情、知性の全人格的方向を円満に展開させるのです。私たちは近代人として社会に在りますが故に、

「原始福音」

といっても二千年も前の使徒たちの在り方を単に外側から真似するような歩き方をしたらダメです。私たちが原始福音というのは、その質をとらえて、この現代の社会の現実において、それがどのように生かされていくかということです。

御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。」（コリント前2・7

～10）

とあるように、神の深きところまで極めるというのは御霊の智慧であって、私たちの側の学問があるという条件付けはいらないのです。パウロはヨハネ、ペテロ、ヤコブと異り、律法を学び、当時の最高のギリシヤ文化を取り入れたけれど、そのようなギリシヤ的な智慧やユダヤ的な義なるものを、彼はキリストの前にすっかり棄ててしまった。だから今度は、キリストの光に在って、かつて棄てたところのものは逆に福音として本当に自由に神さまに用いられて来たのです。ゲーテは『ファウスト』の始めの方で、

「我々は（我々学者どもは）ついに何も知らないということがわかった」

と、ソクラテスの言葉みたいなことを言っています。

「何も知り得ないことを知り得た」

というのが、知的なギリシヤ的な嘆きとすれば、ヘブライの嘆きは、

「噫、われ悩める人なるかな、この死の体より我を救わん者は誰ぞ」（ロマ7・24）

という実存的な嘆きです。

知的にも実存的にもダメだと。本当に神さまの前に自分を投げ出して「無学の凡人」になり切ったときに初めて福音の真理に生きるのです。そうなれば、福音は私たちの胸三寸の中に驚くべく宿る。

一休和尚が山伏に出会った話がありますね。山伏が、

「仏法は何処にあるか」

と聞いたら、一休和尚は、

「胸三寸」

と答えた。すると山伏は剣を引き抜き一休和尚の胸をえぐろうとした。一休和尚の胸三寸を切って仏法を取り出すぞと気合をかけたわけです。このとき一休和尚少しも騒がず、

「年毎に咲くや吉野の桜花　木を割りて見よ花のありかを」

と答えた。さすがの山伏も一休の当意即妙な短歌に降参して、逆に一休の弟子になったという話です。私たちの中には対象的には取り出して見ることはできないが、

「わが言は霊なり、生命なり」

とのキリストの言が生きているのです。仏法ではない書、聖書の法則、キリストの法があなた方の中に生きている。それは私たちが神の前に「無学の凡人」として告白することにより始まるのです。ですから、ペテロが足なえを立たせたとき、怪しみ驚いた人々を前にして、

「イスラエルの人々よ、何ぞこの事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか」（使徒行伝3・12）

と言って、ナザレのイエス・キリストがこのことをなされたのであって、ただキリストの

名によって祈ったところが、キリストの実が自分にかかって来たことを証したのです。

●投身体受

皆さん、床の中で本当に自分を投げ出して、

「キリストさま！」

と叫んでごらんなさい。叫ぶといっても大声を出すのではなく沈黙の叫びです。そうしたら、御名を呼んだだけで、あなた方の中に必ず力が来ます。これが本当の祈りです。なぜ、親鸞が

「南無阿弥陀仏」

といい、日蓮が

「南無妙法蓮華経」

だけを教えるかというと、それは、そこに全体が凝集しているからです。それならば、ペテロ、ヨハネが叫んだ如く、私たちはナザレのイエス・キリストの名を呼んだだけで祈りです。

「祈れません」

という人がありますけれど、何も余計なことを祈らなくとも、

「主イエス・キリスト！」

と、自分を投げ出して本当に叫ぶならば、それ自身が祈りです。その祈りと同時に神の生命、キリストの生命が来ている。この点で今のキリスト教界はズレを来たしている。私たちもそうです。ですから、私たちも決して傲慢になることなく、限りなく「無学の凡人」となって前進して行かなくてはなりません。ペテロが御霊に満たされて叫んだその中に限りない内容があり、

「天の下には我らの頼りて救わるべき他の名を、人に賜いし事なければなり」

とある如く、キリストの他の一切を棄ててしまうほかには如何なる条件もない。キリストだけ！　それに徹して百％投身すれば、イエス・キリストは棄てた一切のものをその人を通して逆に救い上げて与え用いられるのです。さて、

13 **彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、その無学の凡人なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕にありし事を認む。**

とあります。パリサイ人、サドカイ人、殊にパリサイ人、教法師が如何に傲慢な者であるかは、キリストがマタイ伝23章に指摘されている通りですが、その反対なのが、「無学の凡人」であります。即ち、言うなれば謙虚であるということが大切です。魂が謙虚でなかったならば、その人が如何に勝れたものをもっていようと、それは必ず行きづまります。だから私は「砕け」というのです。福音の世界に魂の砕けを失ったならば絶対にダメです。砕けとは、主義主張、自分の信仰などを絶対に言い張らない、無私の態度です。

私は無教会の畑ですが、私は無教会などというものに決してこだわってはいない。教会の人でもカトリックの人でも何でもいい。本当に神さまを拝しキリストを信じている者はみな兄弟姉妹といって、心の握手ができるのです。即ち一切の隔てを突き抜けてキリストに連らなる、無色透明の立場ならざる立場なのです。しかしどうしても、私たちが福音の世界で展開して進んで行こうとしたならば、この無私、砕けのあり方は欠くことのできないことです。それでないと観念的になるか、霊的傲慢になるかです。どうかこの使徒たちの言を読んで、如何に彼らの魂の姿が謙虚であり健全であったかを学んでください。

それではどうしたらいいでしょうか。新しい方々がいらっしゃるから言わざるを得ないのですが、皆さん、心配いらないです。十字架を仰いでごらんなさい。そこに私たちは砕かれてあり、無私のものとされているのです。そこにはたと気がついたとき、自分は無私であった、砕かれていたということ、これが十字架の恩寵の世界です。ヨハネ、ペテロが本当に復活のキリストの前にひれ伏し、十字架の贖いを受けとったからそうなって来たのです。それで、

15 **ここに、命じて彼らを衆議所より退け、相共に議りて言う、**16**『この人々を如何にすべきぞ。彼等によりて顕著しき徴の行われし事は、凡てエルサレムに住む者に知られ、我ら之を否むこと能わねばなり。**

とあるように、この使徒たちが福音を宣べ伝えると同時に、力あるわざを如何に実証していたかということは、こういった中によく見えます。

今のキリスト教界でこのようなキリストの実力を身に体している伝道者が何人いるでしょうか。私もダメです。しかしながら、このキリストの智慧、力、生命、愛、実存が

「無学の凡人」

を通して現象するこの「徴」を何人も否むことができません。その点において私たちも徴を重んじます。しかし、徴を御利益として徴のために徴を求めてはなりません。ユダヤ人は徴を求めたが、これはそれ自身のために求むべきものではないのです。いうなれば、徴とはイエス・キリストという神の現象体を受けとって行けば自然に現れてくる。太陽の光を受けて花が咲くように、皆さんも自ら「無学の凡人」となっているのです。

ですから、

彼等によりて顕著しき徴の行われし事は、凡てエルサレムに住む者に知られ、我ら之を否むこと能わねばなり。17**然れど愈々ひろく民の中に言い弘らぬように、彼らを脅かして、今より後かの名によりて誰にも語る事なからしめん』**

とあるように、祭司やサドカイ人たちはペテロ、ヨハネを呼んで、一切イエスの名により語り教えないように命じたのですが、

19 **ペテロとヨハネと答えていう『神に聴くよりも汝らに聴くは、神の御前に正しきか、汝ら之を審け。**20**我らは見しこと聴きしことを語らざるを得ず』**

と答えています。これが本当の福音なのです。パウロが、

「耳未だ聞かず、目未だ見ず、人の心思わざりしところのもの」

と、イエス・キリストの事実を言っているように、皆さんが魂の目をもって見、魂の耳をもって聞いた福音の事実は、告白しなければならない。本当に受けとれば告白せざるを得ないでしょう。だから福音の世界では一人一人が伝道者なのです。そして私たち一人一人が日常生活の中に、このキリストの愛を、生命を、光を大胆に受けとりつつ、実証して行くのです。

皆さん、どうか、

「私はまだ信仰が浅いからダメです」

なんて言うのは止めましょう。自分なんか見ないでください。「無学の凡人」でみな同じです。キリストは、

「後(あと)なる者は先に」

と言われました。どうか、私のような古株はどしどし乗り越えて進んでください。私はそれがうれしいのです。どんどん素晴らしくキリストを実証する人が出てもらいたい。

●原始福音

祭司とサドカイ人たちは、

「お前たちに聞くのと神さまに聞くのと、どちらが正しいか」

と言ったペテロの言の前に全く降参して、罰することもできず、仕方なく釈放した。そこで、

23彼ら釈されて、その友の許(もと)にゆき、祭司長・長老らの言いし凡てのことを告げたれば、

とあるように、その友の処に行き一部始終を報告すると、

24之を聞きて皆心を一つにし、神に対(むか)い、声を揚げて言う『主よ、汝は天と地と海と、其の中のあらゆる物とを造り給えり。25曾(かつ)て聖霊によりて、汝の僕われらの先祖ダビデでの口をもて「何ゆえ異邦人は騒ぎ立ち、民らは空しき事を謀(はか)るぞ。26世の王たちは共に立ち、司(つかさ)らは一つにあつまりて、主および其のキリストに逆らう」と宣給(のたま)えり。

と、詩篇第２篇にダビデが詩(うた)っている通りだというのです。

これはまた現代においても同様です。国際関係などいろいろなことを調整し、計画していますが、また一方では原爆、水爆を保有して、長距離誘道弾などを造っているのがこの20世紀後半の、イエス・キリストに逆う姿です。それで、

27果たしてヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人およびイスラエルの民等とともに、汝の油そそぎ給いし聖なる僕イエスに逆いて、此の都にあつまり、28御手と御旨(みむね)とにて、斯く成るべしと預(あらか)じめ定め給いし事をなせり。

とあります。ここに

「油そそぎ給いし者」

とは神さまのことで、「油」とは神の霊ということです。

また「御手と聖旨」とありますが、聖書には創世記から黙示録に至るまで

「神の手」

という言葉がたくさん出てきます。キリストは按手をされて医し（いや）を行われた。使徒たちも按手によってキリストの霊を受けさせた。私は時々皆さんの上に按手をしますが、それは人間小池ではないのです。按手を通してイエス・キリストがなし給うことを私も共々キリストの前に砕かれて受けとるからです。皆さんも苦しいとき互いに手をとり助け祈り合っていいのです。御手は御旨と共に働くのですから。

それで、信徒たちが、

29 **主よ、今かれらの脅喝（おびやかし）を御覧（みそなわ）し、僕らに御言を聊（いささ）かも臆することなく語らせ、**
30 **御手をのべて医を施させ、汝の聖なる僕イエスの名によりて、徴と不思議とを行わせ給え』**

と祈り、

31 **祈り終えしとき、其の集りおる処ふるい動き、みな聖霊にて満たされ、臆することなく神の御言を語れり。**

と書かれてあります。その集会所が霊動したのです。神の御言とは霊における言、異言、霊言（れいげん）です。

米国のクエーカー教徒は非常に熱心に祈ることにおいて有名です。「クエーカー」とは「震える人」という意味で、熱心に祈り神の霊に感じて震えるので、これを傍で見てた人々が軽蔑してそう呼んだのですが、しかし、このような教会からも村八分にされ、人に侮（あなど）られた祈りの人たちが却って米国の良心、世界の良心として逆に霊の教会となって世界を支えているのです。教会といい、幕屋といい、集会といっても、御霊によらなければ決してキリストの体として在ることができません。

これらのことを見ましても、使徒たちの信仰の現実は決して観念ではなく、イエス・キリストの御言を、全面的に投身して、無私無我となって、キリストの真理を受けとり、これに生命づけられていたということがよくわかります。キリストの生命力が言となり、力となって自由自在に彼等の中に働いた一如の消息なのです。私たちもこの使徒たちの原始福音に掴（つか）まれて行くのです。ペテロ、ヨハネの如く、自分の側に本来持っていたもの、学んだもの、それら一切を投げうって、「無学の凡人」となり切って、キリストの限りない智慧と力と生命と光とを受けとって行こうではありませんか。